



TITLE:

<批評・紹介>Chow Tse-tsung(周策縱), The May Fourth Movement : Intellectual Revolution in Modern China, Harvard East Asian Studies VI

AUTHOR(S):

伊藤, 秀一

---

CITATION:

伊藤, 秀一. <批評・紹介>Chow Tse-tsung(周策縱), The May Fourth Movement : Intellectual Revolution in Modern China, Harvard East Asian Studies VI. 東洋史研究 1961, 19(4): 532-541

ISSUE DATE:

1961-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/148191>

RIGHT:

で、その精細な學識に敬服の念を新たにするのである。しかしまた他方では、なお幾つかの問題もないわけではない。序文の中では、本書が道教研究の一端として、善書に關する思想史的社會史的研究をすすめたものと紹介されているが、善書はただに道教的範疇に屬するばかりではなく、儒教的要素、佛教的要素も多分に持つている。三教思想という場合、この三者を明確に區別するには、いささか困難な時も多々あるが、善書の研究の順序としては、まずその三者の分析を行ない、その上で融合の實態を明示する必要があるのではないか。ともあれ本書では問題が明代に限定されたため、かなり省略された點もあるようで、今後清代を中心とした續編の中にそれらの多くが解明されるであらう。一日も早くそれが續刊されることを期待するものである。

(間野 潛龍)

Chow Tse-tung (周策縱), *The May Fourth Movement—Intellectual Revolution in Modern China*, Harvard East Asian Studies VI, Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts, 1960, 486p.

△今から思うと五四運動に誇りと驚きとを感ずる△とのべる著者は、毛澤東が十五年前に卒業した長沙の高等學校に在學したこともあり、そのころ、△五月四日、我々はあなたに失望しない△という白話詩をつくつて、郭沫若、田漢の編集する新聞に發表したこともあるというほどだから、五四運動の老兵といつていい。どういう事情で現在アメリカにいるのか、明らかでないが、著者が中國共產黨治下の人民中國にあまり好感をもつていないことは、△可能なかぎ

り多くの事實的記錄の紹介△とされる本書の行間からも、容易に讀みとることができる。

本書は第一部、運動の發展、第二部、主要なる思潮の分析、の二つの部分から成り、序論(二五ページ)と關係事件年表(六ページ)附録(一〇ページ)註(六五ページ)索引(二九ページ)が頭尾に附されている。章の構成は次の通り。

- 1、序論。
- 2、運動を促進した諸力。
- 3、運動の最初の局面、早期の文學的思想的活動、一九一七—一九。

4、五四事件。

5、事件後の發展、學生のデモとスト。

6、一層の發展、商人、企業家、勞働者からの支持。

7、新文化運動の擴大、一九一九—二〇。

8、運動に對する諸國の態度。

9、思想的政治的分裂。

10、社會的政治的結果。(以上第一部)

11、文學革命。

12、新思想と、傳統の再評價。

13、新思想と後期の論争。

14、結論、種々の説明と評價。(以上第二部)

ここに見られるように、本書は五四運動の全般的な叙述であり、元來アメリカの讀者を對象としたものであらうから、我々にとつてすでに常識化している問題でも、多くの行をついやして説明されて

いるため、冗長、繁雜の感をまぬがれないのはいたしかたない。けれども、我々が本書に強い興味をおぼえるのは、著者が、我々をも含む現代中國毛澤東の五四運動觀の圈外にあつて、この運動をいかに評價しているかということだろう。

著者にとつて、五四運動が現代中國の歴史的な意味づけとして扱われる必要は、さらさらない。そのため、この運動を現代にいたる歴史の流れからぶつたぎつてきて、試験臺の上に載せ、自由自在に分析しているような感じをうけるが、こうした方法の是非はともかくとして、多角的に問題を發掘し、意外な脈絡を我々に示してくれるのはありがたい。正直にいつて、いかげん紋切型の説明にはウンザリしている我々にとつて、それがかえつて新鮮にさえ感じられるのである。以下、各章の主要な論點を、できるだけ忠實に紹介して行くことにしよう。

1. 著者は『五四運動』という曖昧な言葉の定義づけから出發する。從來の運動觀を、①五四事件と同義に、つまりたんに五月四日の北京學生デモのみを指す狭い見方、②その社會的政治的側面を切り離すか、乃至は兩者の關係を重視しない見方、③中國のルネッサンスとしてその文化的意義だけを強調する見方の三つに分け、著者はそれらの一面性を批判しつつ、五四運動を、一九一九年（以下、一九は省く）から二三年におよぶ文化的政治的社會的諸側面をもつた幅廣い概念として把握する。つぎに運動の背景について、著者はそこに、西歐經濟力による中國の傳統經濟、政治機構の崩壊、およびそこから生じた社會諸力の不均衡とその再編成への動向を探り、地主、士大夫に代つて西歐的知性に裏づけられた新しいインテ

リゲンチャが、社會の指導層として登場しはじめたことに注目する。とともに、かれらが第一次大戰後の世界的な民族自決、民主革命の風潮に刺戟されつつ、それとはあまりにも對照的な國內政治の混亂——軍閥によるさまざまな反動のカオスのなから、祖國若返りの自覺を急速に高めて行つたこと、そこに、著者は運動の主體的條件の成熟を認めるのである。また著者は、この運動が、中國史上の學生運動——それは專制政治批判を一身に擔つたものだといつているが——の傳統を繼承していることを認めつつ、歴來の諸運動とは決定的に相違する二點、傳統文明の徹底的改革を志向したこと、個人の尊嚴と民族の自立を標榜したことを指摘している。

2. 著者は五四運動への序曲として、前世紀後半からつづく感性的な愛國主義運動（二十一ヶ條要求で抵抗感情は一層高まつたとされる）と理性的な近代主義運動との二つの流れを認め、それらが留學生の運動を媒介として、次第に組織化されて行つたものと考へる。ここで著者が留學生を重視するのは、五四運動がよい意味でも悪い意味でもかれらが外國で學んだことの總決算であり、留學諸國の社會的文化的條件に規制されたかれらの諸性格が、やがて五四運動の諸側面を構成して行くものと見ているからである。著者によれば、アメリカ留學生は文學改良とプラグマティズムをもつて教育的方法による中國の改革をはかり、日本は軍閥の溫床として留學生の多くは運動の敵となつたが、他面、近代文學の創造者、無政府主義、社會主義の紹介者を生み、また本國と地理的に近い關係から一齊歸國などのげしい運動が行われ、その後の運動の祖型になつたとされる。フランス留學生は中國にユートピア社會主義、無政府主

義を送ってきたが、とりわけ大戦中大量の労働者・學生が渡佛して、その地での連携の経験が、工讀主義、夜學校、上海の労働運動などの基礎になったとしている。

3. 著者はまず新文化運動を、前述の流れの一つ——近代主義運動の發展形態と見、その起點を陳獨秀の『青年雜誌』創刊と蔡元培の北京大學改革に求め、前者が道德、思想の改革を提起したこと、後者が新學風三原則を樹立したことに、劃期的意義を認めている。また北大改革にもなつて、大學の年間豫算と學生數が増加したことも、この運動に物的基礎を供したものとして重視される。こうした諸條件の上に、北大の斬新な陣容が生れ、學内誌『新潮』が誕生し、『新青年』の發行部數の増大をもたらししたものと、著者は見るわけである。ここで蔡元培の北大改革については、蔡の哲學と留佛時代の經驗に關係つけて説明しており、この偉大なる教育家の情熱と改革の手の鮮かさが印象づけられる。ついで著者はもう一つの流れ——愛國主義運動の延長上に、一八年五月、西原借款をバツクに締結された中日共同防敵軍事協定に反對しておこつた、留學生の一齊歸國、救國團體の結成、北京の學生デモといった一連の事件を設定し、北京デモに五四の△下げいこ△としての意義を認め、このとき以來、全國的規模で行われた學生の組織活動が、五四の成果となつて結實して行くものと見ている。著者は、この動きのなかで指導的役割を果たした少年中國學會に、李大釗ら少數の新青年派が参加したことを重視し、それを二つの流れの最初の接近と解している。つまり著者は、そこに、五四における統一フロント結成の兆候を探るわけだが、なお『新潮』と『國民』（『新潮』に對抗した愛國

主義派の機關誌とされる）の性格に見られるような方向の相違を認め、むしろ相互補完的な二つの動きとして、五四にもちこまれて行くものと見ている。

4. ここでは大戦後の歡喜から失望への急轉、學生の怒潮うずまく五四前夜から當日にかけてのことが扱われる。著者は、新しいインテリゲンチヤが大戦直後の樂天的ムードに全く支配されていたことを認め、そこに、新文化運動に培われたこれらの理想主義的視野からする、ウィルソニズムへの過大な期待があつたことを指摘する。これらに共通したこのような認識の甘さを、著者はこれらにおける思想と行動の原理の混沌に歸し、△あたかも長い闇のなかから來た人が、明るい室に入つた途端、なにもかもがみな珍しく見えるように△と形容している。けれどもパリ會議の真相が中國に傳わるや、南方側、進歩黨、歸國留學生、商工團體、労働團體を擧げて政府批判の空氣が高まつたとし、なかでもつとも強い反應を示したのは、過大な期待が一度に瓦解した學生たちであつたとされる。かくて、すべてが五四に賭けられるわけだが、ここで著者は、中國の學生が歐米の學生に比し社會的關心と政治的行動性に富む理由として、一、後進國における學生の社會的役割を自覺していること、二、卒業後の就職不安から大衆運動の指導者となることに活路を見出したこと、三、両親から遠く離れて集團生活をしていることの三點を擧げ、こうした傾向は北大改革以後強まつたと見ている。そして著者は、事件當日のデモの計畫者、指導者を『新潮』と『國民』の編集スタッフと見なし、そこに前述の二つの流れの合流、その統一フロントの成就を認め、ともかくもその前夜には、△萬事が整然

と行なわれようとしていた」とする。また著者はこの時期の學生に強い影響を与えた出版物として、『新潮』、『國民』、無政府主義文獻を挙げ、とくに無政府主義について、テロリズムとしてよりも人道主義的、自由主義的、利他主義的に理解されていたとして、學生の破壊活動性を否定している。

5. 著者は五月四日以後の情勢を、一、學生のデモとストの時期（五月四日―六月初）、二、學生・商人・企業家・都市労働者の連合の時期（六月初―二八日）の二期に分け、一をさらに、北京學連がゼネスト宣言を發した五月一八日を境にして前後二段階に分つ。そして一期の前段には思想的、政治的、社會的指導者の結集が見られ、デモ、請願、街頭演説を闘争の手段とし、後段には學生のゼネスト、日貨ボイコットが行なわれ、反軍閥、抗日の強力な武器になつたとし、北京學連の成立、地方都市の動き、蔡元培の離職、學生のゼネストなど運動の経過が具體的にのべられる。ここで著者は、學生の運動が、新文化運動の敵對者たる林紓や康有爲、それに吳佩孚、張敬堯、陳光遠らの軍閥までも（反安福の線で同調したとされる）巻きこんで行つた事實を挙げ、この運動が愛國正義の闘争として、新舊を問わず、廣汎な國民諸層の支持をうけていたことの證とされている。

6. ついで運動の第二期における、上海を中心としてその他の都市に及んだ統一戦線の形成について、考察される。まず商人や企業家たちについて、かつて張勳の復辟運動の際に、なんの反應も示さなかつたけれども、このとき運動の一翼を擔うまでになつた原因として、著者は、直接には六月二日―四日の學生の大量逮捕というシ

ョッキングな事件がこれらに與えた影響によるものとし、その他二つの點——この運動の日本と本國政府に對する愛國的意義の自覺、および日本商品の進出に對する深刻な脅威——を挙げ、こうした原因が、これらを日貨排斥と罷市に起ち上らせたものと見ている。また都市労働者の場合については、べつに著者の説明はないが、學生の大量逮捕に對して卽座に同情ストを打つて出たこれらの革命性を、自明のこととしているからであらう。しかし、なによりも著者が重視するのは、統一戦線形成の推進力となつた學生たちである。六月初の統一行動がともかくも實現しえたのは、そこに、商人、企業家、都市労働者の抗日反政府の情緒を組織して行つた學生たちの努力がなければならなかつたとし、著者は、ゼネストの過程で生れた救國十人團の各地労働者に對する働きかけ、および上海の學生指導者たちの總商會に對する説得活動を、高く評價している。そして著者は、以後、《大衆の中へ》運動にまで發展して行く、學生の民衆に對する啓蒙、組織活動を、新文化運動の繼承、發展として扱っている。

7. ここでは、五四後における新文化運動の新しい波についてのべられる。著者は、五四を契機としてジャーナリスト、政黨指導者たちの間にも幅廣い連携が成立したとし、執政府の強引な彈壓がこれらを一つに融合させ、また學生運動に對する廣汎な支持が、新文化運動に不満を感じている人々をも、その是認に向わせたものと見ている。こうした運動前線の統一とともに、從來漠然とした方針しかもつていなかった『新青年』が、一九年冬の宣言により政治問題不介入から政治性尊重に轉じ、『新潮』が翻譯と出版を通じて社會

との連なりを深め、また若干の舊新聞雑誌が體質を改善し、新思潮を紹介する多数の出版物が創刊、刊行されたことに、著者は、新文化運動がマス・コミを獲得して社會への影響力を増大したことを認める。と同時に著者は、實踐活動の面でも、學生運動が中國學連を中核として、全國的に組織を擴大し他の階層組織とも連携をもつたこと、多数の學生が國民黨に入黨したり、工讀互助團を結成したりしたこと、また教授、學生が、海外から著名な學者や思想家を招いて公開講演をもつたり、夜學校、自由學校を設立したり、その他壁新聞、公衆圖書館、社會奉仕などを通じて、社會教育と大衆組織化を推進したことを擧げ、そこに、一五年以來唱えられてきた新文化運動のスローガンの實體化、具體化を認めている。そして二〇年のはじめには、政黨からの積極的な支持もあつて廣汎な基盤を獲得するにいたつたとし、著者は五四後の新文化運動の新しい波が、中國の精神的統一に大きな役割を果たしたものと見ている。けれども、著者は、そこに一面のひよわさ——政治的實踐を含まず、思想的には、新しい村、主義、相互扶助論、人道主義などの理想主義に支えられていたこと——のあることも指摘している。

8. ここでは、運動に對する外國乃至は外國人の、さまざまな態度についてのべられる。著者は日本の態度を、政府、御用新聞と自由主義者(吉野・福田)、中央公論の二つに分ち、前者が終始惡意あるデマを流し、國內の革命的情勢(米騒動)下において、この運動を排日暴動に仕立て上げ國民の怒りを外に向けようとしたのに對し、後者は侵略主義、官僚、軍閥權力からの解放に共通の場を見出していたとする。アメリカのそれについては、著者は駐華大使ライ

ンシュの視點を擧げて、彼が一つには日本の進出に對する利害から、二つには彼の良心と政治的信念から、各國外交官のなかで、中國青年に對する最大の同情者となつたとほめあげる。また租界の權威筋のそれについては、はじめこの運動に同情を示していたが、六月初の罷市・罷工を境に、日本や在華企業家のアジにのせられて、運動が過激主義と關係あるものと見るようになり、六月六日から敵視政策に轉じたとし、これを、當初は好意的だつたノースチャイナ・ヘラルドの論調が、六月九日より急轉して暴徒よばわりしはじめたことと對應させている。最後にソヴェトのそれについて、著者は、カラハン宣言が、執政府により二〇年三月まで差押えられていたにも拘らず、國內になんら騒動がもち上らなかつた事實を擧げて、この時期の中國において、日本が宣傳したようなコミューニズム、IIボルシェヴィズムの影響がなかつた證とし、この反植民地主義のアピールがひとたび周知となるや、自由と保守とを問わず國民各階層に感謝をもつて受け入れられたこと、また宣言に對する執政府の壓迫、對ソ交渉の拒否、および運動に對する租界當局の流血の彈壓が、それを劇的かつ効果的なものにしたことなどがのべられる。

9. 運動の深化とともに、統一戰線を構成する諸勢力の追求課題が、一般的命題から特殊の命題に移行するにつれ、その間に矛盾と分裂を生じたことについてのべられる。著者は、問題と主義、論争を、思想の分野における分裂の最初兆候と見なし、自由派が一面で左派の教條主義を批判しつつ、自らプラグマティズムに依存していた自己矛盾を明らかにする。そしてこの論争を契機に、思想前線は、現實逃避乃至は現實無視の非政治主義(アカデミズム、アナ

「キズム」、社會教育、實態調査（勞働、農村問題の）を主眼とする文化活動主義、および政治活動主義の三方向に分裂したとされる。また著者は、分裂を必然化した他の契機として、デューイとラッセルが來華して、將來の中國についていくつかのイメージを提示したことを挙げ、それらをめぐってインテリゲンチヤの間に幾多の論争を生み、分裂を促進したものと見ている。著者は、こうした思想上の分裂は政治行動における分裂、再編を必至ならしめたとし、軍閥支配のもとで近代的改革をはかる右派（自由派・保守派）と、ソヴェトの影響下に積極的な組織活動に入つた左派（左派・民族主義派）との斷層を明らかにし、そこに、好人政府論および國民黨改組、共產黨成立をそれぞれ位置づけ、また新民學會、少年中國學會などもろもろの團體の分裂にまで説き及んでいる。

10. ここでは、運動の國共合作→國民革命への方向が探られる。五四後そのスローガンは政黨に採擇され、反軍閥反帝國主義運動に擴大したとし、著者は、そのなかに二つの別なコース、進歩黨・自由派の反内戰運動と學連・總工會・總商會による反帝國主義運動を認めている。商人の組織化は、馬路連合會（上海）、同業公會（天津）の形で地方都市にも及び、また勞働者の組織化は、上海・廣東を據點として、從來のギルド・タイプのものから近代的組織へと、急速な成長をとげたとされる。婦人解放運動は女子學生の學生運動への参加を通じて、政治活動が活潑化し、また教育運動も、自由派の「純教育的立場」のナンセンスが次第に明らかにされ、教育獨立、教育費獲得、内戰反對の運動を通じて、左派、民族主義派の指導性が強まったとされる。學生運動も、一九年以後、組織性、行動

性は次第に高まったとし、著者はその發展を次の三段階に區分している。一、政治的事件にも關與した愛國的思想運動の段階（一五、一七年—一九年）二、外への政治的影響力を強め、機關紙活動への参畫を通じて政黨と結びついた段階（二〇年—二一年）三、政黨の組織活動の役割を擔い、運動が國民的規模をもつた段階（二二年—二四年）。

11. この章より、いわゆる新文化運動の分析に入る。著者は文學革命を、コミュニケーションの革命、中國的發展法の變革として捉え、それが中國青年の心理的發展に大きく寄與したことを認める。これに對して反對派は、章士釗のごとく政治權力に依據して相當の影響力をもつたものもあつたが、概してその力のはじめから弱かつたとされ、その理由として著者は、反對が文體論としてではなく倫理問題として展開されたため、説得性に乏しかつたことを指摘している。そして文學革命の成功とともに、その指導者たちは第一線から急速に脱落して行き、代つて五四後のインテリゲンチヤの風潮をそれぞれに反映した、ヒョーマニスティックな文學研究會（客觀的な人間追求）、ペシミスティックな魯迅（抵抗と逡巡）、ロマンティックな創造社（存在からの飛躍）が分立し、それらはまた五卅をへて反帝反軍閥の革命文學が擡頭するとともに、再分裂、再編をとげるものと、著者は見ている。

12. 著者は五四における孔教批判の前提として、清朝考證學（Han Learning）をとり上げ、その批判的學風が古典の文獻批判だけに、とりわけ特殊的祕傳的な音聲學、語原學、語義發生論（つまり小學）の部門に限られ、孔子の思想自體を問題にしたり、改訂

したりすることではなかつたとする。また儒教の stereotype 化に抗した清末の二學者——曾國藩と康有爲においては、むしろ大膽に、孔子の復活が試みられたと著者は見る。そして二年孔教會の結成以來、康有爲の活潑な動きとともに孔教國教論がもり上り、天壇憲法草案に採り入れるなど軍閥、保守派がこれを支持したことが、清末以來中國に紹介されてきた現實主義、功利主義、自由主義、個人主義、社會主義、進化論に支えられた新しいインテリゲンチヤを刺戟し、徹底的な孔教批判を生むにいたつたとされる。著者はまた、プラグマティズムと唯物論を新しい思想方法の雙璧と認め、前者は懷疑と實證をスローガンとしてアカデミズムを形成し、後者は陳獨秀、李大釗——社會主義研究會（一九年二月設立）を通じて、青年學生に大きな影響力をもつたとしている。けれども著者は、社會主義研究會がなおギルド社會主義、サンジカリズム、フナーキズムに依つていたこと、五四期の李大釗が階級闘争、決定論、倫理的機能の缺如などの諸點からマルキシズムを批判していることを挙げ、當時におけるマルキシズムの影響を否定する。著者によると、唯物辯證法が中國に採用されはじめるのは、二三年ごろのことだ。そして著者は、『孔家店』破壊の下手人として、陳獨秀、吳虞、魯迅らを挙げ、陳の批判が、たんに孔教は近代社會に不適のものというだけの、直線的論理にとどまつたのに對し、吳虞のそれは、孔教批判のチャムピオンとして、十年間の傳統思想研究に裏づけられた體系批判であつたこと、魯迅はより獐犢な、より效果的戰士として、その『匕首』(invisible knife)は深く中國の國民性を剔抉したことが指摘されている。

13. 著者は、新文化運動のメディアとなつた西歐思想（「科學と民主」）が、未だ嚴密な検討を経たものでなく、ために思想前線の統一を可能にしたものと見、運動の過程で問題が明確化するにしたい、西歐思想の複雑性が判明して、國故整理運動、東西文化論争、科學と人生觀論争など、後期のさまざまな動きを惹起したものと考える。國故整理運動については、それが今文學の傳統を承けつ、新しい研究視角として不可知論と發生學的方法をもつたが、傳統思想の西歐の意味づけでしなかつたこと、批判と破壊には勇敢であつても、新しいものの建設にはなはだ慎重であつたことにその弱點を認め、現實には①超保守主義者に恰好の口實を與えたこと、②批判的に遺産評價をするに足る、論理的思考の訓練を受けた人が少なかつたこと、③中國青年の關心を、緊要な近代科學の研究から外らせたことなど、その反動的側面を指摘している。また著者は、二〇年ごろから活潑化する反宗教運動に注目し、そこに、迷信否定の五四精神に出發する思想的動機と、教育權回收運動としての愛國主義的動機を認め、それが、教會をして帝國主義・資本主義との無縁を宣言せしめた、いわゆる教會革命に結果して行くことをのべる。ついで東西文化論争について、それが新文化運動の原理に對する強力な挑戦であり、大戰後の西歐における懷疑の風潮——沒落論によつて加勢されていたことが指摘され、著者は、この問題を最初に體系化したものとして『東西文化及其哲學』の論點を紹介し、直覺と非決定論、非實用主義を説き、儒教と中國文明を擁護したものであるとしている。さらに科學と人生觀論争について、それがやはり新文化運動への攻撃であつたこと、その中心問題が認識論にあることが



把握されず、アカデミックな論争に終始したことが挙げられ、著者は論争の基底に、オイケン・ベルグソンとデュニー・ハックスリ、理想主義と實用主義・自然主義、自由意志論と決定論の対立を見出している。

14・著者はここで、それぞれの立場からする五四運動の評価を批判しつつ、自らの評価を提出して本書の締めくくりとする。自由派のそれについては、ルネッサンスや十八世紀啓蒙と對比させる見方をとり上げ、個人の自由、解放を主張することにルネッサンスと同一課題をもつが、民族の経済的自立を要求したこと、社会主義が登場したことにおいて異質であり、また、合理主義と自然主義が運動の主潮となり懷疑論と偶像破壊を現出したことにおいて十八世紀啓蒙と同一方向を示すが、啓蒙主義が新興中産階級により推進されたのに對し、中國のそれは古い層に反對する社會諸勢力によつていて、ヨーロッパの歴史概念にあてはめることは、どだい無理だとしている。そして、自由派の評価は多くの場合ドグマ的であり、運動の初期の段階のみを強調して、後期の政治的性格については理解がないと批判する。國家主義者、傳統主義者のそれについては、孫文の矛盾した評價——運動への共鳴と新文化への不満と——がのちに國民黨内に混亂を生じたとし、黨主流の見方を『中國の命運』に代表させ、傳統倫理を國粹として尊重する立場から、そのパトリオティックな側面のみ強調して、新文化運動を嘲笑し、その懷疑精神に反對していることを挙げ、それが大部分のインテリゲンチヤを國民政府から離反させる結果になったと、著者は見ている。また共產主義者のそれについては——著者の批判的となつてゐる感があるが

——、初期の李大釗において大アジア主義に反對する人間解放の運動、陳獨秀において、辛亥革命の繼續としての、インテリゲンチヤを主力とする民主革命と規定され、ともに十月革命と共產主義者の指導ということとはあまり問題にされなかつたが、毛澤東は、新民主主義の出発としての反帝反封建民主革命と規定し、十月革命とレーニンの呼びかけを重視しているとのべ、著者の批判はもつばら、毛澤東のそれに集中される。まず、五四運動を世界プロレタリア革命の一環とすることについて、著者は、運動の末期にはたしかに共產主義者の影響があつたが、毛澤東自身、當時未だアナキスト出版物の購讀者であり、胡適・陳獨秀・李大釗の禮讀者であつた事實を挙げ、これを否定する。また『反帝反封建』なる規定に對し、著者は、帝國主義なる語がすでに早く日本から入つてゐたこと、反封建なる觀念も新文化運動のなかで早くから叫ばれてゐたことを挙げ、それが本來マルクス・レーニン主義のものではないことを指摘する。さらに運動の主力の問題について、著者は、毛澤東すら「五四運動」と「新民主主義論」のなかで、それぞれ『social forces』（選集Ⅱ、第二版 p. 546）『the united front』（同 p. 693）とのみ規定したのに對し、共產主義歴史家（華崗）がそれを『the communist intelligentsia were the major leading force』（『五四運動史』修訂本 p. 168—9）としたことの無謀さかげんを非難している。著者にとつて、毛澤東の思想は『dogmatism, distortion, and self-contradiction』と映るらしい。そして最後に、著者は自らの評價を提示する。すなわち、中國自救運動の終點として、インテリゲンチヤによつて指導され、社會的政治的文化的革命を促進したところ

の、中國の近代化を前提つけた知的革命(Intellectual Revolution)である。その成果――①士大夫・地主・軍閥・官僚など古い支配層がもつ傳統的な思想、制度、習慣、關心に對する思想的實踐的變革、②知識人の脱皮――人生觀、世界觀の擴大變化、③コミュニケーション革命、思想革命、出版・大衆教育の發展は家族革命、社會變革を促進、④農民・勞働者・市民の政治的行動性の増加、⑤政黨の組織と行動に新しい原理と方法を注入、⑥知識人の權威主義に對する抵抗力増大。その缺陷――①民族遺産の美點を輕視、②新思潮に對する輕信、③實現への幻想――忍耐と執着を缺く、④思想變革と工業化(つまり資本主義化)との關連性が把握不足、⑤自由派、國家主義派の消極性は社會主義、共產主義の勃興に寄與、⑥西歐側の強硬策と自由派指導者の政治性缺如。

以上、本書の概要を紹介してきたが、著者が多面的に提出している問題を強いて關連づけようとしたため、著者が強調したいと思う多くの論點を、置き去りにしてきているかも知れない。もとより、私の力のいたらぬところではあるが、《多くの事實的記録の紹介》とされる本書の敘述からして、これも、或る程度やむを得ないことと思う。

おわりに、本書から得た、私の若干の感想をのべておきたい。大きいものから先にいうと、著者が結論までもつてくる論理の運び方は、はなはだ妥當を得、豊富な資料を驅使して、いわゆる新民主主義路線のメカニズムを明らかにしてくれるが、結論の部分で、ドンデンがえしを食わされたような感じを受ける。著者の華崗批判には

たしかに一理あると思うが、毛澤東批判にいたつては、言葉の上でのいいがかりとしか思えない。また著者は二・三章で、五四運動への伏線として二つの流れを認めているが、それは五四にいたつて合流するとはいえず、元來中國の近代化運動に伏在する、二つの異質的な流れではないだろうか。五四後における統一戦線の矛盾と分裂も、やはりそこから出てくるものと思うが、著者はそれを、新文化運動の深化によるそれぞれの問題接近方法のズレとしか見ていない。また著者が三章で、新文化運動を二つの流れの一方の發展形態と見ていながら、六・七章では、五四後の動きを總じて新文化運動の繼承、發展とのみ扱っていることもおかしい。新文化運動の繼承、發展があるならば、もう一つの流れ――民衆の自發的運動の繼承、發展もあるはずだ。それゆえ、著者にとつて、五四後の統一戦線の分裂は、ただ、新文化運動という大樹から或いは右に、或いは左に派生した小枝としてしか扱えられないのである。もちろん、學生・知識人による民衆組織化の方向が、新文化運動からうち出されてくるとする著者の見解は正しいとしても、また、そうした方向に沿つて五四後の統一戦線が結成されて行つたことは事實にしても、その過程で、學生・知識人が民衆の自發性に學び、新文化運動を止揚して行つた側面を見ないならば、片手落ちという他ない。つまり、著者の《Modernization》のイメージは、上からの「フンワリした壓氣樓」なのである。このことは、結論で著者が運動の缺陷とする、五四のインテリゲンチヤが思想變革から工業化(Industrialization)への展望をもたなかつたという指摘などにも關連してくる。半植民地下の中國で、帝國主義・封建主義の搾取と強權への認

論は深まつても、一體どこから、明るい工業化への夢が湧いてくるのか。また著者が、五四運動の終點を、東西文化、科學と人生觀の論争にもつてくるのはどうだろう。五四後の趨勢を、新文化運動の繼承、發展と見る著者からすれば、當然この邊にもつてこなければならぬまい。この二つの論争が新文化運動の收支決算であつたことは、もちろん認めるが、その結末のウヤムヤに象徵されるように、それは本來、民衆から疎外された場における遺老たちの繰り言に過ぎず、歴史の動向とは無縁とまではいえないにしろ、重視するには足りぬものだろう。五四運動の下限は、もつと他のところに求めらるべきだ。もう一つ、五四運動を世界プロレタリア革命の一環とすることについて、著者は、半面それを認めているようでもあり（序論）、半面キツパリそれを否定し去つて（結論）。とくに十月革命の一發の砲聲は、我々にマルクスレーニン主義を送つてきた（「論人民民主專政」）とする見解に對しては、著者はムキになつて、その根據のないことを實證している。この言葉は口調がいいから、よく引かれるものだが、このことが中國の新民主主義革命を決定づけたとは、誰しも考えないだろう。五四運動に、華崗のいう「共產主義知識份子」が登場したかどうかということは、たしかに重要な問題には相違ないが、この運動が、十月革命にはじまり三一運動や米騒動にも連鎖する世界プロレタリア革命の一環であることとは、自づから別の問題である。むしろ最近の中國の研究に見られるような、李大釗や毛澤東の五四期の論文に見るマルキシズム受容

への一觸即發的な條件の成熟をこそ、注目すべきだろう。これと関連して、小さなことだが、決定的意義をもつマルクス主義研究會の設立の時期について、未だ確かなことがわかつていないことだ。著者は、「ボルシェヴィズムの勝利」はもちろん、「新青年」一九年五月のマルクス主義特輯號に載つた「私のマルクス主義觀」までは、李大釗におけるマルキシズム研究の姿勢を認めず、また『北京大學日刊』の記述によりつつその時期を二〇年三月と押えているが、一方には、多くの引用者をもつ波多野乾一の一八年十一月説がある。もしも後者が正しいとすれば、著者の五四運動に對する見解は、半ば崩壊する。

問題にしたいことは、まだまだであるが、本書の價值は、私の蠅螂の斧とも思える批判に、到底没するものではない。はじめに書いたように、もしも我々が華崗的な五四運動觀に未だ泥んできるとすれば、本書はたしかに頂門の一針とならう。資料的にも、利用しうるものを満載している。日本語の文獻で『五四運動史』と銘打たれたものは、私の知るかぎりでは、天野・池田・河地譯の華崗のものしかなく、隣國の、この光輝ある運動の通史を、我々の立場から我々の手で書くことは、喫緊の課題であらう。中國からは、めざましい努力で集成された貴重な資料が、續々と入つてくる。最後に瞿秋白の言葉を引いて、この極めて拙い紹介の結びとしたい——當時愛國運動的意義、絶不能望文生義的去解釋他——『鐵鄉紀程』。

（伊藤 秀一）